

## 狂言 武悪 解説

「武悪」とはシテ(主人公)の名前である。名前に「悪」の字を用いることは、古代・中世ではよくあることだった。悪源太・義平や悪七・兵衛景清などは良く知られている。この場合の悪の意味は「強い」ということで、この狂言の主人公「武悪」は武術にすぐれた者という意味でつけられた通称である。

さてその武悪といわれる男が無断欠勤を続けているため、もはや堪忍袋の緒が切れた主人が、太郎冠者に上意討ちを命じるところからこの狂言は始まる。常の狂言にある「名乗り」などは無い、緊迫した雰囲気が始まり、前半部は同僚を討たねばならぬ太郎冠者の苦悩を中心に悲劇的に展開される。

打って変わって後半は喜劇的展開となり、狂言らしい笑いに満ち溢れている。太郎冠者が命を助けた武悪が偶然東山で主人と出くわすところから始まり、太郎冠者の機転で、武悪は幽霊になって主人と再会し、主人を翻弄するという展開で終わる。

多分に中世の時代背景「下剋上」の匂いがする曲であるが、狂言「武悪」はよく「三人シテ」といわれるように、武悪・主人・太郎冠者のそれぞれの人間ドラマとして、深い意味を持ちながらも楽しめる名作であり、上演時間一時間にあふ大作である。

## 一武悪一あらすじ

武悪と呼ばれる男が無断欠勤を続けていて主人はどうどう我慢がならず、太郎冠者を呼び出し、討って来いと命じる。断れば自分も成敗されかねない主人の迫力に押された太郎冠者は武悪を討ちに向かう。

太郎冠者は武悪が武術にすぐれているため、だまし討ちにしようとする。武悪を川へ誘い出した太郎冠者であったが、ついには覚悟を決めて討たれようとする武悪を哀れに思い、命を助ける。

太郎冠者は主人へは討つたと嘘の報告し、喜んだ主人は太郎冠者を連れて東山へ遊山に出かける。

一方、武悪は命を助かったのは日頃信仰する清水の親世音のおかげであると思いい、東山へ出かける。主人一行と武悪は清水近くの鳥辺野(火葬の地として有名な所)でばったり出くわす。

この危機に太郎冠者は機転をはたらかし、武悪に幽霊になって今一度主人に会えと言いい、主人へは「ここは鳥辺野だから実は、今見たのは武悪の幽霊でしよう」と脅す。

幽霊となった武悪は地獄で大殿(主人の父親)に会ったなどと言いい、父親をなつかしがる主人を翻弄しだす。武悪は大殿の頼みだと言いつて、主人の太刀・刀・扇まで取り上げることが、最後には大殿から主人を地獄へ連れてくるように命じられたと言いつて、おびえる主人を追いながら退場する。